西王母
大仏供養
六浦
寿占
松山鏡

七

西王母

ワキサシ 有難や三皇五帝の昔より今に洪
河の代は聖ねまさるがの霊皇のた
めしおほし 地 其の威盛え日にそひてやく
ワキ連 玄御代の民の海のごとくよ 地 ゆたかにて
廣きはめぐみを ワキ 天よかるやき地より
みちて 上同 如辰の興まする数くれりく 中ヨリ

万天よりてる星のごとく。百官卿相雲
客や千戸万戸のすゝを[illegible]しかねて
をよろこふ四方の門道ふむかはさく
市をなし金銀珠玉光そへてまし[illegible]明
うやまひて日夜の勝劣[illegible]なし
なりかゞやくあいだ喜見城こそ楽しけれ
をしづかなり桃李物いはざれども

おのづから市をなし貴賤まじはる袂
それ面白や四季折々の時をえて
おなじ国土の所々皆是[illegible]の花
の色香がある法の三門の心ざしあり
時や至りぬ三千年に実なる花心咲く
ごとき志の雲がかざしとなるや左や
君よりきしいさく君にさゝぐる

上哥 やすみしる君の治心にあゆみをはこびて
隙ゆく駒の法の道遊子里の外まで
うへもなき道に至りてゆきゞを盡
山會道場の法の水広きめぐみの真
あまねき恵は誰までもいさみの
世の心ありく つくて妻（?）…
乃作 妻女とゆかむ花の後

是は三千年に花咲実なる桃花なり
然るに今武帝の代に至りて花咲く事
ひとへに此君の御威徳なれば捧げて
持ちて参りたり そもや三千年の
花咲く実は聞きしのみなりしその
西王母がその桃の 中くにてさ
ことし今の捧物 されはこそ花

まことや三千年に花咲桃の
シテ 桃李物いはねど
ツレ 春つくる年月を送り
迎へ〳〵て　ツレ 此春は三千とせになれ
てふ桃のことしより花さく春に
あふ事を唯是君の恵あり
き国土のゑにも種桃花の色そこし
上合地 あるは桃は不思議や久かたの天津

花のあるしの姿をみることそうれしける
シテ上 綾ひは心あるをとこさそ露のまでやられ
この袖の月のかけ雲のうへまてそその
めくみあまねき御代よりも猶あきぬ
地歌 うれしきあめか下人心の花なるぬ
シテ 君は天上の 地歌 楽しみに限り思ふ言葉もなと送
むかし年はふるとも限りなき隔の程も

ロ半詞
其ハ如何なる人ぞ
東方朔とも其人
西王母の使の
姿をとりしや

間なく誠は我こそ西王母のなるらむよ
と帰りて花の実をもちあらはさんと
ぞ天かそありきぬ天にこそ上がり給ひける
口半上謡
風急仙呂律の拝みさえぐるを奏し
て音楽のこゑをそゝる天津風雲
の通路心をよく面白やかく
まてしせむ王うの家ぞなほまし拝を

の孔雀鳳凰迦陵頻伽出てまふ
聲にまふや袖の羽風天津雲の衣
なるあまの羽袖をかへすいろ〳〵
の花をかざしの中にさきそふみえたるは
西王母の姿ありてそかゞやく
ぐやうきすむけ衣をちやくし仙家
まつてしはききぬ玉の冠

きざよくやうにをはる桃をしらよ
このまゆをまもりかくせる君が行くをまね
桃實乃　花乃かはりにきざすなるを
花をしるしらせやさしきみやげぞ手まはり
河えきぎり曲水のえんかやこかまの水
とりたりのまもりのだんやめの猫
もとはそもたちひきそれまく雲の

花鳥春風和く雲路よりつき
七王母を使ひよらせ王母を使は
よろこや天河乃のぶく思しも行くそむ
里にはれ

次第

大佛供養

忘れぬ草の名にし負ば忍ぶよや
かひの身なるらん
是ハ平家の侍
悪七兵衛景清にて候扨も一門ハ西國の
方よりこの宿所に子細あるによつて
洛陽より清水寺へ一七日参籠申て
候又今日ハ南都大仏供養の由申候

げにも若草乃子と母と二人隠ては猶よ
かはれ乃折節ま賊よ紛まし向敵乃
め咽今南都へと忍び　サシ　あされやな
ふりゆく影を栄つ花紅葉
乃寿永乃秋のいろまれも思ひあはれ
みさそいれてかりを別し都乃空
なに久鄙乃うき住居　下　似まぬ無〻の

うひもあら弓矢乃家よ生まれ来て
上音
ウ　三笠乃森乃ことを頼みしうくをや篇
本乃まゝにていまハ母乃御ゆかり
ウ　秋ぞも数乃乃ちよし鳴る春日乃里つゝ
きみきりくぞ急ぐ猶よ南都若草
息にうち急ぎてはやしかるゝ御行
猶さと尋ねやよせん　母詞　梅乃ゆみの

景清か洪ほと所くに有やうし南都に
や三世の諸仏ゞ子乃景清ハ一方に
あらせて立給へいつに業にハ
母 かくて此者と申よりも世をしのび扉に
立出て景清ちかと思へハ　シテ 増
おそりまへてや悦しく菓の御坐を給
扇まゐらせ候　母 さこそ給へ候り

今へ母此程ハいつくにかひつるそ　シテ さら
ハ西国の海乃かたへにして宿所乃子細
ありしか都よりは清水に参籠仕
候に大仏供養乃由承り候ほとに
打出若験に鋪きし御音信乃為に
参りて候　母 扨はうれしくもきたる
給ひて候ぞましい事ね上きゝえれん

候まじく候をかまへてきつと シテ「見え給ふ今めか
しき作られ候ふまでもなく候へどもかう
まれ候ふ 母「誠や人の申しは頼朝
を狙ひ申すとやらん風聞候ふ其の
誠にて候か シテ「是は思ひもよらぬ仰せ
にて候ぞ景清は西海にて失せ給ひし
御一門の御跡を弔ひ申さんと思ひ

も候はぬ也 母「かく宣ふは景清か
ことしも明日をもしらぬ老の身に景清
を見ん事も今日ばかりなり シテ上哥「風のたよりも
きく母の身の行末を御心にかけて
あからさまに シテ下「起きもせず寝もせで
ては思ひかねなげきしを隠すとの
いもあらぬ 声「景清がこの頃の母も哀

ご思召を一門の船にちかづく扇
をあふへ膝をくみて向きなをり
乃景清か頭よりも此舟母よあを
てかゝるまじ類そのさき下武略さ海
ゆまりおそれとゞめず擂の母
よ乃を主従隔まつりしんだりより舟
やまましたりける身のつ騏驎も老ぬ

きしは鳴る馬よおどろかいさく也あさや
夜のゆるく候ほどり御いかさま
申候 母 擁へて身をよらく候志
そて重てあり給へ宗旨経
き母は慈悲御あと望はまえをた乃
そしよもくる此森乃雨露のつく
ごまとあそしめうし我油をまたほりかね

たち添ふかげぞ形見なるしかも親心かうの如く無念
のとをり景清も涙を流して又
みなとゞまれる世の中に
今はまさしく大仏供養の供養あるべき也
作者は源家の官軍右大将頼朝と
申すもの也かゝるめでたき御事なる
は聖武皇帝の御建立大仏殿に

ておはしますを又此君の御威光にて今此
御寺にあらはれ大仏供養の御事も
やう/\ありがたきやうに日の三笠
の山に陰たなびき法の声色の様々に
供養をまうして経をよむ面白
や奈良の都の時めきて繁昌なる
御ありて我も我も引つらなる敬

たくらむ謀して。我はこゝろを乃か
名乃悪七兵衛景清と聞ゆるを捨
きて人やあらじと張浄衣に烏
帽子ざきに我まゝ思ひされ姿に今
なりけるものゝ時節到来して天下の
ずいかかりて今はきまさふ身の果
ぞ哀なる　宮人乃出まつると志く

狩衣　ほをまもり社務にして今を
こゝろさし祈たのみし　慶よましかれ
宮寺の供養の場よ出ちこそ
行者なれハ御前まちに立まいるぞ
すこの〳〵　是ハ春日の宮仕お
我らぎよの佛乃御供養道場を清めの
役人なるが行しに加りゆく所へ

「さて白妙よあら尊し是ぞ仏の御
供養 「扨古の波は陽と吹ぞさら
仏と神も同一躰ぞかし去れば此の守
なるに行ゑこそ見え給ふべき 「つむ
とまられし袖と尽きぬと君を守らせ御
蔵之 「あらうれしきかな白張のさ
よう三みる真見の全ね 「ひとつ

「さかり うらめしかりや汝実のた
言葉のまた清げなるもくと貴きれし
あらそれ思ひ給ひざらめやう
あへ立帰り又人影に隠れけれど
「言語道断のすりやもしなきものをといふか
る者ぞと尋ねて彼へも平家の侍
悪七兵衛景清にてぞ正しく我君

をともひ中や庭へ掾より藤も固めの居よ
と付対とらせけりやと俄いうふ座
いうに藤も固めの兵随ひきいきびしかりを
しよ家し去もせずやうやうと叫ぶ衆もう
きよともりを高声に下知されかけ
こまれてゆもて急にて國義けい
ちのうきよの皆一同りだらさいて侍

シテ詞
其時景清まよ立いて思ふやう
宮立のきまてさ弓矢の恥辱と成へ
きおきおくべし一旦おかおあひて重まつ
て附部せと侍へとも大音あげてよ
もうやとをり　上セル　作是も平家の侍
悪七兵衛景清と　上同　名乗りてあへまを
わざれもとびくまうりと抜て立向ひ

大勢にまぎれいりさもかくめし
警固の兵四方へばつとよりける
中にわつぱの武者走り出でやがて組
まんとすれどもやうときよく見えぬとみせて
手をとによりわうちまち勝負をとめ
さしきりつめる景清は足をひらと
ばとし斬合ひとしていて彼あざれをせ

げにかなはじとや景清は、かくれ家に雲白山
志はまたひかへおはしますとよう
時節を待つべきなりと、虚空に去りにし
てうせにけり

第 六浦

思日立るすゑ遠あるく東にまの
きぬま乃を是ハ洛陽乃邊より
出たる僧にて候我未東国を見ず
候程に此秋思日立陸奥乃はてまて
まても修行をせはやと存候道
坂乃関乃数々とうそてにゆく

行浦も手にハ氷海の舟渡りを湖の山
ちとせの緑よ靡く乃草海て照り
程なき星月夜鎌倉山をも越るそ
六浦乃里にハ渡りて行く金堂
の行も一浦よりおもふおもはやそ
ろくと思ひ日くれぬ日も暮ぬ
て急ぐほとに見えハちや相模國也

浦乃里に渡りて此の波寄る瀬
あらく安房乃清澄へ向ふ
はるか又世まきふそうはわけ行ける
の代をみなとえち六浦乃称名
とうや申なる立寄一見せちや
思ふ何も佐賀見ゆく山のは
今をきそふと見えて咲ける錦

をとりわきて都にも加様
の紅葉の山々にはあまた見えけるが
堂の庭に楓の候が立余の木々
時も唯夏木立のごとくに青葉
にて紅葉せざるは何といふ謂のある
事はいかさま尋ばやと思ひ候
申さばやと思ひ候いかに御僧は何事

を仰候ぞ 口 げに〳〵是ハ都より始て
御一見の人にて渡ります程の紅葉今
を盛と見えて候に青葉なる楓の
一葉も紅葉せぬを御不審を承
し候 シテ宜く御覧しさふらふ
て候いにしへ鎌倉の中納言為相と
と申し人紅葉を見んとて来し所

に下り給ひし時山々乃紅葉いま
だなかりしに此木一本に限り紅葉色
深く色有しを為相卿取
あへずいかにして此一本に時雨
けん山にさき立庭乃紅葉葉と
詠し給ひしより今までもこゝろを
留めて候 面目の詠哥也か

がき数ならぬ身なれども草木の
そもにかくれりぶりもつ紅此一
なれ跡をも見て袖乃時雨て山に
さき立たり 意有錦乃御手向や
なかゞ此女の面目あらさう候へ
偖くはまよ為相卿の御詠哥ようぞ
み紅葉を留めたる謂ハいかなる事や

六浦

らん
シテ「げにげに不審は御理りなれどさ
き乃為相卿の時この木
皆よそよりも先がけて紅葉せしかば山里の
犬も通らぬ古寺の庭にだにも紅葉ある
立ちて紅葉せしに依つて功なる
御詠吟にも預るべきは功なり名遂て
身退くは是天の道なりと云

古き詞を深く信じ今に紅葉せで当
木の色は常盤木のごとく也 ワキ「是しも
不思議の事なれば木の心をさと
まことに老翁となる御身なく
いかなる人にてましますぞ シテ「今は何
をか包むべき我は此木の精なるが
かりに御僧にまみえつゝ海辺なき御前

顕きしありたりし身ハ宮ニ旅居
しく夜もすから法を説給ひし葉
て姿を見え申さんと夕部乃空
も冷しく秋古寺乃庭の面ニ月乃
羅乃袂ニ梢の花を纏ひ分
て行道も遠き木ニ寄り

上哥
所から心ニ叶ふ積君のゆくへ法乃

聲も松風とたちかはる秋の夜乃
月説法の庭ねおもふまゝに雨の
やく
是有かたの御弔屋ぞ始まる
ちくれ寂しく見えられたる二度宮ニ来り
たりし夢をさまし給ふにぞよ
重
深き月説法る庭の面にぞうつる
女人と見えしくて影のとうくに見え

非情草木悉皆成仏の
あの妙文を疑ひ給ひそ猶く言を
かへて謂く 夫四季折々の草木
おのまゝの時をえて花咲き染
くのそのあそびをあかしては
頌いふ 先青陽の春の初めの香
たえなる梅がえのかほりそめて
詠人のはや春に咲きぬる 又は桜の
花盛り雲と乃を三吉野のゆふ
れ花にぞあくがれ 月日経る程
きはうつろふあたら桜は散る庭
乃面にさぞ紅の色乃花の垣
根や宿ふみふつる時にあかつ
くまに秋をまつは咲ぬれは消ぬ宮の

なき村時雨のふるうちに紅葉
ちりし紅葉を志づまる山下紅葉
らぬ色とうや さらでもあはれ
まの奥の山里に あはれ深なれ
都人の袂も涼しき言の葉の露
の情にあらましかば海をまくらえ
かぞふる紅葉もちりくのえ

涼しき法を授けつつ 仏果をえしめ給へや
夏行月の夜遊をなし 色なき
袖をかへすや さまざまの 楽の夜の手数
を一夜かざしの袖ふれて 紅葉の秋
てるや浪の海の聲のうとう
ゆく小舟の島も程なく 鐘も
聞ゆる 明くるの空の 霧はるる六浦

のうち風山の嵐吹はらひくもなき
紅葉ちるのべの月に照らされてかへるさ
おもひの庭は名のみありて跡もいさ白波
申て帰る山路に行かしきは我の
有乃月のゆかしく思ふ人も其のあり乃月
のがれを紅ふきもいとけふまぐれぬ

哥占

第一 雪に越路の白山は夏陰ながら雪
ふかし　加様に候者は加賀の国白山の
麓に住居する者にて候扨も此程いつく
の者ともしらぬ男神子の頭の白髪なるが弓に
短冊を付哥占をひき候がきとくに候
し由申間祖父にて候者出て占をひかせ

やと存候へばいつも作らぬ哥占の所不望
神みくかくに伝中かうまゐらする
画字稱とこそなうもし哥占のひくも白
木のあづさ弓　そも哥は天地ひら
けし始よりも陰陽の二神あまのいま
たふゆきあひのさよ君が手枕結び定
め世々まもるひ国を治めていまも

道ある好文たりら向を経へ益
哥占とそ世結ぶるや神風や伊勢
の浜荻名をかへてよしといふを
あしと云も同じ草なりや難波
所名伊勢物語子也と難波の芦も高
經へころびきええつる梓弓伊勢
や日向の事ともしらへ日向みすをも

同じく候へ〔ワキ詞〕めでたき事の候〔シテ〕何事にて
なそ〔ツレ〕梅が枝は何国の人にて渡り候ぞ
只今申す若死人にて候ふ何とて白髪と
は成りて候ぞ〔シテ〕やがて着く人の所不
審尤も候 是は伊勢の国二見の浦の
神職なるが我一見の為に罷り出でし
或時俄に死去せし三月とやらんよりこの

方よりかく様に白髪と成りて候 是も神の
御咎と存じ候に当年中に伊勢太神宮へ
参り候中にて作〔ツレ〕梅が枝習ひて参ら
せ其奇占を乞ひ申し〔シテ〕安部晴明の刀一番
よき手に成りたる短冊に奇特を遊ばし候へ
とて参らせ候〔ツレ〕家の数々よく住を短冊を
立て上なる札は何と書かれて黄金に南無と書き

く東白西くれなゐ并乃深家の山秋楼
よ見へて山　須弥山を積重ねたる
みしは是八文乃力をもて崩しなば　さ台
親みしき老此程有常住の山間生死
のさかひを為中作　心乃中山重ねるも
むしてゆめ中さう。先今夜の有常を
尋ねよ。鳥渡一返乃風よりおこりて。

求金二つあんの童結よ顕ふ。そ死須
弥八金輪よ至長じて高た第十六
万由旬の勢ひ四州常楽の波よ
うかひ。金銀碧瑠璃玻珠が浪うつ乃
影。五重色空者雲よ移ふさうれ八須
弥乃かをうつ浪よりて南贍部州
の草木みなりありといへり故そて南八

青しとハ綠くまた空よりも父乃恩のふる
き事ハ高山千丈の雲もなほひくし
ふかきハ父ハ山深きとハ風病の身色
志ろも生老病死乃沈身をとをまもハ西
どれよみと乃へ〳〵るハ命期アらうの
滅きるあらふ貴ハ院よ難殺其
不常ならき空よ又深きとは。志

さうりた深色とりふく〲文字よハ換
命路せよふとくへ斬命のころちや出まと
ま〳〵ハ識よへ命期乃みちあまきたゞ又深
気み却衰して二度空み換生の青
命此経と被へる斉占乃ふ我み我を
しるも思召まむへ
菩提しや依ハ若
しろまし〳〵作る中〳〵の力よ心易

ゑ思召され候 〔シテ〕此狂言申て候まゝ
是成物なれ共古の不望なれ 〔シテ〕撫
なれとも古の所望なれハ以前のやうに一
番よみに留りまれ縁冊乃奔をなれ
よう候 〔子〕鶯のうひごの中ハ時鳥とい
ふの父は御さなく母が父は似せと 〔シテ〕是も
父の事をは書まずお 〔子〕さんは父をは失

ひて書申候 〔シテ〕是ハ早あひかゝる古
みうたを 〔子〕いやいや是ハ社寺中へ
〔シテ〕去とてハ古よ偽りよをあらし鶯
ふ何ふ言葉の縁あれハ鶯のうひごの中乃
子規たいつりはを卯月経時もない
よあひたりや今啼は時鳥なるなれ
〔子〕さんは子規にてな 〔シテ〕面白しく。

當面喉舌の囀り鶯乃子ハ子成
けりく不思議や此者共くの
人ぞ 伊勢乃国の者 在所ハ
二見の浦 父の名字ハ 二見の太
夫渡會乃何某 信真父ハ 別
れて七年八ヶ年 擲おもとのみ春
名は 幸菊丸と申也 あハそも

神の引合せ是社父の何某よ
ゆかしきや父かくまします共かゞいさん
ともこそハ白髪乃 身ハ白雪の面
忘まし これ迄こそ我父の 子ハ
子なりきると 郭公乃 程経て今
そめくりあふ白玉あひきより親やて
子ならふ二見のうらわこの所にてあやこ

ゆきかへるそ。空や君をまもらむ。越の白山
志らねども。ゆめにみし人に行衛とて
四鳥の別れ親と子に二度逢ぞ不
思議なるべく　なか〱のき事成る
社にて。信ずる子息なくしかる　或人
仏様をなき我子なり。是も神の
御心合きと存じ候ふ。取る律は仏曲

きこしめさる　遊は目出度けれ
みて仏如来又人の中有きんは地獄
のみ様々世界よ作りてはらさひ
ある由家及くしゆ遊の事よ躍よく
ゆめきへ　安きこゝろ〱ゆめの
一曲を狂言綺語にて神氣をそへてう
つ〱成久たよし〱海生の〱すゑ

まこと面しろの一曲なりけし驚
きを夢を中さん月乃夕の浮
雲ながく此の世は迷ひなるべし
明日を待ちみるも今日も空しき暮
あはれ無常の虎の声肝に銘じ
雪山の鳥啼く思ひをいふま
其一生は唯夢のごとし誰か百年

の齢を期せん万事は皆空し何れか
常住の思ひをなさん命は水
上の泡風に随つてめぐるがごとし
魂は籠中の鳥の開くを待ちて去る
消ゆるものは二度見えず
去るものは重ねて来らず須臾生
滅し刹那が離散をとゞめしきうゐ

や釈迦大師はかんぎやうの教をときまし
てこそつたへて閻魔法王の呵責の言
娑婆世界の利剣を抜きもちつつば
くもりは煙をまねかれと思愛きらくろ
を悩ませ我らの黄泉の責に随ひ
さる是の為に地獄をまよはせいく
きくれは是や是よりいく道求を

所行をたださいまり指目をさきいろく
従ひ我思ひ兼て奮友皆ともに指摘
折て故人をかくさまへ親疎多く
うちましねば時うちり早去て今ぞ
まえそうたらんや人と成り我ゆき
須らく文常かう降　三界無安猶如
宅天地まさに死者の身ありいかん

や下劣貧賤のほうよかひてみやあ
とる甚罪かろうらん死よくるしひ淡
うあるに孫業よ也しひ抑そ之ざ
其もい地獄のくるしひいきうちうそ
身をきざみて截断して血狼藉たり
一日一夜にちうらに万死萬生すり銅樹
地獄の苦しひハ手に伐る石樹よ

どれハ百節まいくしく良よ刀山踏
时ハきむしゅ去よきぐれとうやせ死くろう
地獄が苦しひ是アとやうがいの大石も
ろく比羅人をとうて次の火盆地獄
ハうう火炎をいそくまハやぐきの乃
骨ハよりえくたる火を出し頭時ハ
焦熱大焦熱乃焔よむまひ頭时ハ遣

大紅蓮苦氷にとぢられ鉄杖にうたれ
或は猛火燥究うをやく飢ては
鉄丸をのみ渇しては銅汁を飲むとかや
地獄のくるしびは無量なり餓鬼道
苦しびをせ遍あり畜生修羅の道
しひも我らかいうてまちるべき身より
出来る科なれは心の鬼の身を責て

か様に苦しびはうらみし世月の名の浮雲
は後の世まで迷ひなるべし偖の世に
写すとは何と照さん胸の鏡よ心の
みゝにあく苦しみやかて今来
思ひ切よ身はあとやおかまへすそ苦
出しやあらうらめしやかきやおふ
彼人の怖気だつ面色変りけり

つるきを抜けは　五躰ゆるみて声

めらく　白髪は乱ましさかみの　色

おちくきるぬくふく　天よりさきひ

地みたきて　加茂川のこゝもとにて

く時しも卯乃花くだしの五月雨

もつるやとまる面は白汗をながして

弦よは露乃志ら玉時雨ねあられ玉

ちる数足かゝれとまりかゝりとかくの茅志や

く柏よ深き岩は雲代西のかたへひとまれ

さ立川か肝膽をくだきつゝ神のおさこ

まり申上るとみえけるが神はあらた世

給ひぬとて猶もしくしと狂ひけれはあらさはや

親子よろこひつれてぞ伊勢路乃古市

まゝつも帰りけるは二見の浦又も帰る

光二見の浦に島なびく伊勢志摩
國々そろへりきまく

松山鏡

口平ノ右

是は越後の國松の山家に住居仕るもの
にて候扨も某つれそひし妻
かくれ昨日と過今日と暮れはや三
年に成候又忘れ形見に姫を一人
持ちて候が母うへを歎き候ほどに
だいの屋を作り乃原に参りて念ごとゞ日

さて彼の母の日ごろ持仏堂に
立出燈をまゐらせやと出られ
雨となる屋ったい時さめかくく
花とも見ぬ雲とまきぎれかしのあれ
ゆく末をもらば日の首途に関寺なき
まはば母御によ離れちいかや院
三ったら行れをあれあまるむぎし屋

行すゆ姫の独ことを申ければに姫の
有りける所ありけるぞ持仏堂を
あけ（ ）ば姿つまちやおよやめしあと
立ちよりやうにけづり姫ば扨を姫の母に
とてまうし時をとのひ切者も母せさせやと
御ひつき〆一族ちもの孫よりりば今
はうさき母の住居たりば男子あら

先父と二所にあるへからん女子まうけけれとも
たいの屋を作りおきしに父の家
思ひ悩よとよりかけまもうけさなく
立むかへる手にまさりけれハしておよやう
むすめのおもひかはりきをきかれて
仰ニ梅さん入乃申を誠ニて作ひき
我はや、うろなる今れ母もて木像とし
作りける音呪咀思ひもあると云ハ誠の行と
てた拝れまいらする歎心をも拍ちあるそ
母を恋しく思ひ経念仏し弔ひて
ふる郎したる母を成仏しおはします
同し蓮乃縁と成へき事にたのもしく
まさにだ我にたてまつる事まつきへきま
さて尊なりりの一へき母を本意に頂

おとゝも同じ罪にまかりなるゝなれ
歎かんよりは行ひをこそ申さねそ
さやうに御なげきあらばかへつて寸戸
けしくれ浦さゝや母御前とぞ限られ
此時ごの鏡をかたみせよとこそまもる也
母が姿を残すをとゞまりける恋しさ
時々みるくしかも帰は顔にあれ

されはうつゝに見ゆるまたは母の姿とおぼしく
うつりしよりは姿をやがてみて給へ
あはれ母なる跡もなくなりし
そのまゝにと面影を残さきを給へる
母御の慈悲ぞ有難き不審に思
ひしいかなきまるを鏡山より給
此父の前く　是なる不思議成

かやうにめでたきおりしも姫の母の御行

ありがたくこそうつりて候へき

但きつと聞し出したる事には漢の

武帝乃后李夫人とならせ給ひ

て後御門后乃ゐまをおぼしめして給

ひかる姿を甘泉殿の壁にうつし朝

暮歎給有しかどもなほよみ給よ

かゝれ形見なれどもおもかげは笑はず中く

うきことのみ増るとおぼしめしける時

仙人のつたへしをきく滅后の姿

を一目見ばやと思召し是乃

限ある世にて反魂香をたき給ひし

すかしかは数へしまかせて月乃夜

くもゐの庭にて反魂香を焼給へば煙の

うちに后の御姿まぼろしに見え給ひしためし
こそありけれ我朝の聖武皇帝の后
光明皇后もかくれさせ給ひて後帝
きはまりの御別を惜しみ給ひ梵天
に祈誓し給へども閻王憐み給ひ玉
の輿にのせ奉りて二度娑婆に送り
給ひしためしもありけれどもそ

まさに代のるかげ是は末世の人ならねに
ざやかなる母の方今と見へ給ふにたがはねの
母を恋ふ念強きを深く情み給ひしほ
どこそ天照の大神もあはれんとおぼして
鏡を見るやと海に底ざれ共社に納めれ
きこえけるをいはれやいひうつりひめごこの
鏡の母が数のうちにありはあさきこそ

よしなく節なき事を申そ
うらめしやあまりに祖母乃ましまさぬを
思ひ隔つる山鳥の尾よ見えさせ給よ
うつし鏡乃あかりちかき居たり空や
あはれなる涙もいまだ乾ぬ袖よおもを
妻をうしなひめまし候ぞとおもふや
哀衣乃みどりしかあはれ石ぬれ袖め

よし父よみとうとくたる神よいたさ
よみちこゝ乃親のかたみまゆをまきたれ
びとほそし神もかゝる哀成を見すさ
てきぬ涙もそこの悲しやおぼつかなよ
里見るまゝに鏡おもしろ母よ恋見せさよ
われ我影よ於うて寺ゞ気色なり
さまざま狂物をみれてかきすれく

口千句

「言語道断のことかな我教へし鏡よりゐう
をみるく母が歎かるゝ昔より申ならはいう
にあるゝ山松の山家に住みいぢ先祖
の前みて世まれたるさうねをつきだ父
をうぎれけりをあはれれまうくかなしき
事まゝ申すれてまるらはれしぞ某一年
都へ上りし時鏡を一面買うりてされが
母まちせそのへいせにあさいのまゝ候は
みひしか今もの時娘をよび我が
恋しく思ひし時ハ此鏡を見よと申し
ほどよ我影のうつるを見るらくおもひを
はらし歎くれ不便さいはぎかやく不
捨鏡の謂を語つる歎をとゞめた
やと思ひ候ただ何いうに娘にあつるく鏡

さればよ何ゆゑおそれ給ふ花の影の
うつろふ色とも見えねば父へ立よ
る度父の新扇をうつしきあさきの
うち出にしものをいつとなくしまし
ヒメ 宮こ父乃ねがひのこゝろどそかくさとも
ワキ みよし野乃 峰の山吹風ふけも
ヒメ うつる陰もちりまじり
ワキ あさましや

ならひ候ぞ ヒメ 陰をあやまつ ワキ あれ
かはよ 子もすなほに見る母に似る
よそ乃影なるをいやとよ ワキ 父
ゆめうつゝともわかぬ居は雲
ツレ女 居もれし面影の鏡や 子は親に
似るものと思ふ故に 我も又
かたちをうつしみれ 住事明らかに

まへらすなり旧友零落して
あるは泉に沈みて水となし
むかしこれハ則ち漢の都をさるか
うるは清堂より花といひしも今は
も蜀人文をこのみしみちのさいぬるをも
娑婆の古郷にかへるハ錦の
ちう海きこのため むかしをりをりけり

和しきすかたいつかよ唐士
ありもしらぬ賢女乃ゆかりさる
うき世のならひ思ひなきまさ花の猫
ありし昔やかりとおもひしん形見
乃かたみ破りくすまりそうき三日月
れなひよまち明く眼前みをたえ主も
あれしうさ年月てかれ里れ行その

荻乃枯葉もそよ風乃たよりに傳ふなる
まことを國乃まことなりあらぬ妹背乃
りまこと乃うたかひやまもの梅を
あまりをもかゞみの鏡我ひとりおぼゆる
あらぬ影みまし半月乃山乃はに
ぢうかゝなりしあらはれてぞむかふ
さればさ折節に　御くすよさるも

まくらかよし鶴ひとりさびしきうちに
まづかくて羽を休めて見し程にさびしさ
りいまはよそとなくうつるやおぼず
鏡のうつれとありありとめのまさしく感
まり満月乃山のは出て璧玉を照らして
ゆくなりけるや賞せしめんかたへぞ
かくれなきまるし　めすよ罪人何とて

さてさいごう時の眺と云つぱ冥官
いつらなり倶生神ハ左右に
善悪をしるしよこの御前で蒙り照し
乃まえるゝ撫鉄乃杖を振上て
ゐ蝉のくかゞら娑婆をやぶる
病んだまハ冥途乃脱乃夜ゝそう
れ鏡乃ばいりさうき面おまさいさき

ひきむきあまたよ娑婆にて羅
さうよこいしてはきやおしく
孝子乃みう極功力かゝく鏡乃影
をようやくみきハなうてゝまよく庭
膚ゟ又まゐアもやう云なのかれうく手
を今ぞれもおらう菩薩乃膚
像うとみえうよ卯かり虚空に音楽

ぎく見えぬ冥途乃亭ほをいや
地獄にかへるとて大地をかつぱと
踏ならし大地をかつぱと踏破つ
て奈落乃底にぞ入にける

右之本者觀世太夫織部
以章句眞本今亦新令改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛